

経営概要

労働力 2名

経営形態 酪農+畑作（小麦）

家畜飼養頭数、出荷乳量（令和2年）

・経産牛 49頭、育成牛43頭 計92頭

・年間出荷乳量 444.38t、

認証取得（津別町有機酪農研究会）

有機JAS牛乳（平成18年）

JGAP団体認証（令和2年）

石川 賢一 Kenichi Ishikawa

真美 Mami Ishikawa

(有)石川ファーム

急がば回れ

有機JAS牛乳の認証に加え、代表を務める津別町有機酪農研究会（7戸）で、令和2年度にJGAP団体認証も取得した石川さん。安全・安心プラス（+）付加価値をつけた牛乳を生産するため、環境整備や労働安全にも、地域の仲間とともに取り組んでいます。

Q. 農作業事故に合わないために、気をつけていることは

A. 仕事に追われるのではなく、ゆとりを持って、計画的に仕事をするように心掛けている。

Q. 「牛との接し方」で気をつけていることはありますか

A. 牛との「距離感」。ペットではないので、可愛がりすぎない。ただし、人を怖がらないように接する。

「おびえる牛」が一番、危ない！その他、「キックノン」は使わない。基本的に牛が嫌がることをしない。

また、「牛に足を踏まれる」ことも想定して、安全靴を履いて作業している。

Q. 3年ほど前に、自動給餌機を導入したとのことですが、導入した理由は？また、一番の導入効果は

A. 理由は「省力化」。1日4時間の作業が30分になった。その分、頭数を増やし、経済的にもゆとりが生まれた。

エサの水分や牛の乳量などをみながら、TMRセンターから供給されるエサの量を1頭1頭設定している。エサを余分に残すことがないので、飼槽を片付ける手間が省ける。また、乳量向上も期待できる。「外注化」と「機械化」で、ゆとりある農業経営を目指している。

石川ファームでは、作業負担が軽減されたことで、「ゆとり」が生まれ、安全面への配慮が可能となった上に、増頭による生産量のアップの効果も出ています。安全と利益の両立が実現されています。



1



2



3

1. 自動給餌機導入し、大幅な労働時間減少で真美さん大喜び \ (^ ^) /
2. エサの水分や牛の乳量を見ながら、操作パネルで1頭1頭の給餌量を設定。
3. キャリロボも導入。ミルカーを両肩に担いで牛のところまで歩いていかなくて良くなり、身体的に楽になった (^ o ^)



4. 労働力は夫婦2人。賢一さんがエサ押しをしている間に、真美さんがほ乳と搾乳の段取りを行う。

Q. 事故防止対策を講じる時に、難しいと感じることは

A. 時間とコストがかかる。牛舎を建て替えるタイミングで、作業負担の軽減と安全性の高い環境づくりができた。コストを惜しまず、安全対策をしていかないと、いつか大きな事故につながる。

Q. 労働安全を高めるために必要なことは何だと思えますか

A. 講習会など話を聞く機会を増やす。事故事例を「知っている」と「知らない」では、農作業事故に対する意識が変わってくる。さらに、自分だけでなく、家族や仲間とも共有することが大切。

Q. 労働安全に興味がある畜産農業者に、一言メッセージをお願いします

A. 家族労働で作業しているところが多いと思うので、毎日、ケガがないように仕事をすることを意識する。牛は「生き物」で「機械」とは違う。行動が読めないことがある。牛を驚かせないことが大切。

「大声をださない」、「急な動きをしない」、「搾乳時にはミルクカーの装着側から入る」、「牛舎作業と外作業では長靴を履き替える」などを心掛けている。

それを踏まえ「緊張感」を持って「あたりまえのことをあたりまえにやる」「面倒くさがらない」ことが大事。



5. 搾乳舎は鉄骨等は頭をぶつけない高さで設計。ミルクラインも地下に埋め込み式にした。



6. 牛と人の足に負担がかからないようゴムマットを敷いている。



7. 牛舎の壁や通路には余計なものは置かず、作業スペースを広く確保。



8. 津別町有機酪農研究会のメンバー全員で農作業安全講習会に参加。



9. 仔牛が多いときは、ミルクタクシー（ほ乳用ミルクをあたためる器械）を活用。ほ乳時間が削減され、「ゆとり」をもって作業ができるようになった。